



Title	紀海音の謡曲利用一覧(中)
Author(s)	富田, 康之
Citation	北海道大學文學部紀要, 48(1), 33-45
Issue Date	1999-08-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33742
Type	bulletin (article)
File Information	48(1)_PR33-45.pdf



[Instructions for use](#)

紀海音の謡曲利用一覽 (中)

富田康之

今回は『謡曲大観』第三卷『誓願寺』より第四卷『松垣』までの調査を報告する。

『誓願寺』

●六字名号一遍法。十界依正一遍体。(三・一五五五)

○【参考】思ひ切つゝ一筋に。六字名号一遍法十界依正一遍体。逢たい見たひそひたいも悟は。夢のせかい也△三輪丹前能・第四▽

●心一つを頼みつつ。鐘うち鳴らし同音に南無阿弥陀仏如来(三・一五六一)

○【参考】かしこに立よりてかね打ならし高声に。なむあみだ仏くくへ仏法舍利都・第二▽

『関寺小町』

- ささ波や。濱の真砂は尽くるとも。濱の真砂は尽くるとも。詠む言の葉はよも尽きじ。（三・一六一五）
- 【参考】ながれはたへぬ菊の淵浜の真砂はつくる共。つきせぬ物は幾秋の。〈新百人一首・第一〉
- 狂人走れば不狂人も走るとかや。今の童舞の袖に引かれて。（三・一六二二）
- 狂人はしれは不狂人ともにはしるといふごとく。〈東山殿室町合戦・第三〉

『殺生石』

- 石に精あり。水に音あり。風は大虚にわたる像を今ぞ現す石の。二つに割るれば石魂忽ち現れ出でたり。恐ろしや不思議やなこの石二つに割れ。（三・一六四三）
- しらぬ御身ぞあぢきなき。石にせい有水におと有風はたいきよにわたる。かたちを今ぞあらはす女。かけ地ヲはなれて心魂たちまち。あらはれ出たりふしぎやな。水くきの。筆のかぶると身をそめて。〈鎌倉三代記・第四〉
- 今は何をか包むべき。天竺にては班足太子の塚の神。大唐にては幽王の後褒姒と現じ。（三・一六四四）
- 今は何をかつゝむべき。天竺にてははんぞく太子のつかの神。大唐にてはゆう王のきさきはうしとげんし。〈殺生石・第二〉
- 両介は狩装束にて両介は狩装束にて数万騎那須野を取りこめて草を分つて狩りけるに。身は何と那須野の原に。現れ出でしを（三・一六四五）
- 両介はかり装束にてくすまんぎなすのをとりこめて草をわかつてかりけるにさしもとしを古狐〈殺生石・第五〉

『蟬丸』

●第一第二の絃は索々として秋の風。松を払つて疎韻落つ。(三・一六八二)

(注・『経政』(三・二〇九〇)にも同文有り。)

○第一第二の絃はさくくとして。松をはらつてそいんおつ。これ楽天がみつの友。へ八幡太郎東初梅・第四

●竹の柱に竹の垣軒も樞もまばらなる。藁屋の床に藁の窓。敷く物とても藁筵。これぞ古の錦の褥なるべした(三・一六八五)

○槓のやは。竹のはしらに。竹のかきしく物。とてはわらむしろ。心の内の。へ鎌倉尼將軍・第四

●たまたまこと訪ふものとは(三・一六八五)

○玉のをのたまくこととふ物とは。田のものなるゝなるこのをと。へ鎌倉尼將軍・第四

●目に見る事の叶はねば。月にも疎く雨をだに。聞かぬ藁屋の起臥を。(三・一六八六)

○あけくれの。月にもうとく花をだに。目に見ぬのかなしきは。へ鎌倉尼將軍・第四

『卒塔婆小町』

●山は浅きに隠れがの。山は浅きに隠れがの深きや心なるらん(三・一七一八)

○心あれなと。身を思ふ。山はあさぎに。隠家の。まつとはなしにへ日本傾城始・第四

●あまりに苦しう候程に。これなる朽木に腰をかけて休まばやと思ひ候なうはや日の暮れて候道を急がうずるにて候。これなる乞食の腰かけたるは。正しく卒塔婆にて候。教化して除けうずるにて候いかにこれなる乞丐人。おこ

との腰かけたるは。忝くも仏体色性の卒塔婆にてはなきか。そこ立ちのきて餘の所に休み候へ仏体色性の忝きとは宣へども。これ程に文字も見えず。刻める像もなし唯朽木とこそ見えたれたとひ深山の朽木なりとも。花咲きし木は隠れなし。いはんや仏体に刻める木。などしるしのなかるべきわれも賤しき埋木なれども。心の花のまだあれば。（中略）仏体と知ればこそ卒塔婆には近づきたれ（中略）とても臥したるこの卒塔婆。われも休むは苦しいかそれは順縁に外れたり逆縁なりと浮かむべし提婆が悪も観音の慈悲榮特が愚癡も文殊の知慧悪といふも善なり煩惱といふも菩提なり菩提もと植木にあらず明鏡また臺になしげに。本来一物なき時は仏も衆生も隔てなし。もとより愚痴の凡夫を。救はん為の方便の。深き誓ひの願なれば。逆縁なりと浮かむべしと。懇に申せば。誠に悟れる。非人なりとて。僧は頭を地につけて。三度礼し給へば（中略）極楽の内ならばこそ悪しからめ。そとは何かは。苦しかるべき（三・一七二）

○ハア余りにくるしく候程に。是成朽木に腰をかけ暫く休まふずるにて候。然所にむかふより世を雲水の定なき。且過の僧の独旅通り合せて見るよりも。ヤアいかに老女。おことが腰かけたるは。忝も仏体しきしやうの卒都婆。そこ立のけとありければ。（中略）迷ふがゆへにほんぶ有。悟のまへには仏もなしほむるは順縁そしるはぎやくゑん順逆別なき法心法性。げに本来一物なき時は。仏も衆生もへだてなしと念比に申せば。僧は狂女を礼拝しさらばく。さらばといひて立のけは。小町も今は是迄也と杖にすがりて。よろ。くくと立別れ行。〈富仁親王嵯峨錦・第四〉
○是なる狂女のこしかけたるは。まさしくつほの石ぶみにてはなきか。けうけしてのけふするにて候。（中略）さりとは外の所にやすまれよ。〈鎌倉尼將軍・第四〉

○我もいやしき埋木なれど。心の花のまた残り。（中略）仏体とすればこそそとはには近づきたれ。（中略）とてもふ

したる此そとはもたれて遊ぶがくるしいかそれは順縁にあらざ逆縁成とうかむべし提婆が悪も。くわんをんのじひはんどくがぐちも文殊の知恵悪といふも善なりぼんなふといふも菩提なり菩提もと植木にあらざめうきやう又うてなになし実本来一物なき時は仏も衆生もへだてなし極楽の内ならばこそあしからめ。そとは何かはくるしかるべき。

〈小野小町都年玉・第三〉

○【参考】ていかかづらや。つたかづらはいまつはれても此身もとよりうへきにあらねば。うてなにかやく鏡もなしぼんのう。ぼだいは。法の道づれあらおもしろの世の中や〈鎌倉三代記・第四〉

○菩提もとうへ木にあらず。花ならず木のはしと〈新百人一首・第四〉

●今は路頭にさそらひ。往来の人に物を乞ふ。乞ひ得ぬ時は悪心。また狂乱の心つきて。声かはりけしからず(三一・一七二七)

○ゆきゝの人に取つみてナウいとらしいむすめや。かわいらしきわこじやと。あなたへはしりこなたへはしり。はしりくはしりくくめてめに見ぬ時は悪心狂乱の心出きてこゑさはぎ。すごくと柴の戸のいほりに帰る有様。

〈鎌倉尼將軍・第四〉

●出で立たん浄衣の袴かいとつて浄衣の袴かいとつて。立烏帽子を風折り狩衣の袖をうちかづいて。人目忍ぶの通ひ路の。月にも行く闇にも行く。雨の夜も風の夜も。木の葉の時雨雪深し軒の玉水。とくとくと行きては帰り。帰りは行き一夜二夜三夜四夜。七夜八夜九夜。豊の明の節会にも。逢はでぞ通ふ鶏の。時をもかへず暁の。楊のはしがき百夜までと通ひて。九十九夜になりたりあら苦し目まひや胸苦しやと悲しみて。一夜を待たで死したりし。(三一・一七二九)

○そんならわしもつれ立ゆかん。淨衣の袴かい取て。く立ゑほしをかざ折。もみ裏白うらひとつにかいどり。ちよこく走行ては帰り。かへりては行一へん二へん。三べん五遍。鳥もなけく。鐘もなれく嬉しや今は。九十九夜に成たり。穴くるしめまひや胸くるしやと悲しいて。〈富仁親王嵯峨錦・第四〉

○月にも行闇にもゆく雨の夜も風の夜も。まして霜雪嵐の夜も。〈富仁親王嵯峨錦・第四〉

○行ては帰り。帰りては行一夜二夜三よ四よ七夜八よ。九よ。床のわかれのあかつきは。〈小野小町都年玉・第三〉

○【参考】人め忍ぶの通ひちに。〈山栴太夫葎原雀・第二〉

○【参考】木のはの時雨冬げしき。〈未廣十二段・第三〉

『高砂』

●その名を名乗り給へや今は何をかつつむべき。これは高砂住の江の。相生の松の精。夫婦と現じ来りたり（三・一八六七）

○ふしぎの事共かな。扱しも御身は誰やらん。今は何をかつつむべき是は高砂住の江の相生の松のせい。夫婦とげんじ来りたり。〈本朝五翠殿・第四〉

●西の海。あをきが原の。波間より現れ出でし。神松の。春なれや。残んの雪の浅香瀉（三・一八七一）

○西の海あをきが原の波間より。頭れいます和魂爰に移して真住吉。幾世経ぬらんみづかきや。〈本朝五翠殿・第四〉

●千秋楽は民を撫で。萬歳楽には命を延ぶ。相生の松風颯々の聲ぞ楽しむ颯々の聲ぞ楽しむ（三・一八七三）

○今やおさまる御ことぶき。千秋楽は民をなで。万ざい楽には命をのぶ。あいおひの松風さつくくの声ぞ。たのしむ

く。〈鎮西八郎唐土船・第三〉

『玉葛』

●程もなき。舟の泊りや初瀬川。上りかねたる。けしきかな (三・一九五九)

○程もなき。舟のとまりや初瀬川。のぼりかねたるがれざほ。〈花山院都巽・第四〉

●なほ浮舟の楫を絶え。綱手かなしき、たぐひかな (三・一九五九)

○【参考】心もそらにうき舟の。楫をたへたるごとくにて。〈新板兵庫の築島・第一〉

●なほや憂き目を水鳥の陸にまどへる、心地してたづきも知らぬ身の程を。 (三・一九六三)

○いやしげななりかつかうは水鳥の。陸にまどへる心地して御階のもとに我さきと。〈神功皇后三韓責・第一〉

●立つやあだなる塵の身は拂へど拂へど執心のながき闇路や黒髪飽かぬやいつの寝乱れ髪 (三・一九六七)

○ぼんなふをはらゑどくどしうしんの。ながきやみじやくろかみのとけぬりんゑのわくの糸。〈新百人一首・第四〉

『張良』

●瑤台霜満てり。一声の玄鶴空に泣く。巴峽秋深し。五夜の哀猿月に叫ぶ。もの凄しき。山路かな有明の。月も限なき深更に。 (三・二〇四九)

○瑤台霜みてり。一声の玄鶴空になき。巴峽秋深し。後家の哀猿月にさけぶ。物冷じき。山路かな土も木も。〈未廣十
二段・第一〉

『土車』

●一天四海波を。うち治め給へば国も動かぬあらかねの。土の車のわれ等まで。道せばからぬ大君の。御影の国なるをば独りせかせ給ふか(三・二〇七五)

○御代をことぶく一さしや。一天四かいなみを打おさめ給へは国もうごかぬあらかねの。つちのくるまのわれくが。君のめぐみのめぐりきて。へ鎌倉尼將軍・第四

『定家』

●昔は松風蘿月に言葉を交はし。翠帳紅閨に枕を並べ様々なりし情の末花も紅葉も散り散りに朝の雲夕の雨と古事も今の身も。夢も現も。幻も。ともに無常の世となりて跡も残らず。何なかなかの草の蔭。(三・二二一四)

○あらゑんぶ恋しやせうふうらげつにことばをかはしすい長こうけいに枕を。ならべきまぐなりし情のする。花ももみちもちりくくに。あしたの雲ゆふべの雨とふる事も。夢ようつゝよまぼろしよ。ともにむじやうの世をつくるゑんじのかねのこゑくに。へ仏法舍利都・第四

『知章』

●越鳥南枝に巢をかけ胡馬北風に嘶えしも(四・二二四三)

○【参考】ゑつ鳥南しにすをくひこぼくふうにいなきて。へ仏法舍利都・第二

●浮かむべき。波ここもとや須磨の浦(四・二二四七)

○【参考】二つに成て須磨の月。波爰もとやうたかたの哀はかなく成にけり。〈義経新高館・第五〉

●團扇の旗は児玉党か。(四・二二五二)

○【参考】団のはたは小玉党〈義経新高館・第四〉

『白楽天』

●それ天竺の靈文を唐土の詩賦とし。唐土の詩賦を以てわが朝の歌とす。されば三国を和らげ来るを以て。大きに和らぐと書いて大和歌とよめり。(四・二四七五)

○それ天竺のれいもんを唐土のしふとし。唐土のしふを以て我朝の歌とす。されば三国をやはらぐを以て大きにやわらぐとかきて大和歌とよませたり。〈小野小町都年玉・第三〉

●その身は如何なる人やらん人がましやな名もなき者なり。(四・二四七六)

○御かたは。いか成人にて有やらん。人がましやな名もなき者。〈傾城国性爺・第四〉

●伊勢石清水賀茂春日。(四・二四八〇)

○【参考】昔をいへば神風やいせ石清水加茂春日。などかおふごのなからんと〈殺生石・第一〉

『鉢木』

●いやとてもこの身は埋木の。花咲く世にあはん事。今この身にては逢ひがたし(四・二五五七)

○【参考】とてもかく迄むれ木の。花咲はるにあふ事はうどんげとやらかたいこと。〈山榊太夫恋慕湊・第二〉

○【参考】とてもかく迄うもれ木の花さく春にあふことは。うどんげとやらかたいことへ山榭太夫葭原雀・第二〇

『花筐』

●陸奥の。浅香の沼の花がつみかつ見し人を恋草の。忍ぶもぢずり誰ゆるゑぞ乱れ心は君の為。(四・二五九〇)

○山の井の。あさくはものを。思ひねの。あさかのぬまの花がつみ。恋しき人に。恋やわたらんしのぶずり。だての大木戸いつしかに。よるのにしきどへ鎌倉尼將軍・第四〇

●猶いやましの思ひ草。葉末に結ぶ白露の。手にもたまらで(四・二五九三)

○【参考】とつとおいつの思ひ草。はずゑのつゆのめにこぼすへ山榭太夫恋慕湊・第二〇

『班女』

●春日野の雪間を分けて生ひ出でくる。草のはつかに見えし君かも。(四・二六〇二)

○【参考】かすかの。雪まをはけて生出る。草のはつかにみへし君かも。いにしへ人の。妻こいて。ちらとみへしかつらいとて。へ三井寺開帳・下之巻〇

●それ足柄箱根玉津島。貴船や三輪の明神は。夫婦男女の語らひを。守らんと誓ひおはします。(四・二六〇三)

○あさな夕なのかこち草あしがら箱根玉つしま。きぶねや三わの明神は。ふう婦いもせのかたらひをまもらんとの御ちかひ。神も仏もいつわりのそらさだめなきうき世やと。へ鬼鹿毛無佐志鑑・第二〇

●謹上。再拜。恋すてふ。わが名はまだき立ちにけり人知れずこそ。思ひそめしがあら恨めしの人心や(四・二六〇)

三)

○見るめうらめし。恋すてふ。わがなはまたき立にけり人しれずこそ。思ひそめにしそめばをり。へ鬼鹿毛無佐志鏡・

第二

●今さら。世をも人をも恨むまじ (四・二六〇七)

○【参考】此二道にしぬる身はよをも人をも恨なし。へ山榊太夫恋慕湊・第四

『桧垣』

●かの後撰集の歌に。年ふればわが黒髪も白河の。みつはぐむまで老いにけるかなと。詠みしもわらはが歌なり。昔筑前の太宰府に。庵に桧垣しつらひて (中略) げにさる事を聞きしなり。その白河の庵のあたりを。藤原の興範通りし時水やあると乞はせ給ひし程に。その水波みて参らするとみづはくむとは詠みしなり (四・二六二七)

○夢路ならねど現にもうかれ。こがれて。年ふれは。我黒髪も白河の。みつ輪ぐむ迄老にけるかなと。読しは老女が。こと成ぞや。(中略) 頭基驚立のきて。百とせにいとせたらぬつくもがみ。我を恋とはいまはしや詠ぜし詞は。其昔。藤原の興範が水やは有とこひしとき。たはふれかけし口ずさみ。扱はそれぞと白河の。檜垣の姫がゆうれいよな。へ日本傾城始・第四

●それ残星の鼎には北溪の水を汲み。後夜の炉には南嶺の。柴を焚くそれ水は水より出でて水よりも寒く (四・二六三三)

○皆実相の仏世界。げに残星のかなへにはほくけいの水を汲。後夜の炉にはなんれいの柴を焼。ふぜいもかくやと覚

たり。〈日本傾城始・第四〉

●風緑野に収まつて煙條直し。雲巖頭に定まつて月桂まとなり。朝に紅顔あつて。世路に楽しむといへども（四・二六三〇）

○風緑野に納て遠条直。雲岸頭に定つて月桂円也。詩を釣柳青葉して。松も琴柱を埋かと。たとへにあまる風景は（日本傾城始・第四）

●有為の有様無常の真（四・二六三〇）

○何か別れのかなしからまし。有為の有様無常の誠。倂爰にうかへ共。〈日本傾城始・第四〉

〈つづく〉